

## 岡本先生の笑顔

加 藤 芳 慶

岡本庄三郎先生は、本学の大学院英米文学専攻修士課程の開設に必要な教授の一人として、龍谷大学より来ていただいたのである。今から約9年前のことである。当時は、「英語学」関係の科目を担当していた教員が他大学に転任されたため、学科主任を務めていた私が、役目柄、文法論や英語教育に関する学生の学習相談に応じていた。私の専門はアメリカ文学と英米演劇で、どんなに間口を広げても西欧演劇を辛うじてカバーできるに過ぎない。だから、差し迫った課題であった修士課程の開設もさることながら、それぞれに専門領域をもつ教員の構成を考えると、岡本先生はどうしてもほしい人材であった。‘獲得’には当然熱が入る。修士課程の開設にあたって、いわば‘司令部’役を務めていただいた尾形敏彦先生の許には、すでに岡本先生より、熟慮の末、就任は遠慮したい旨の返事が届いていた。普通なら話はこれでおしまいである。しかし、アメリカ文学研究双書全5巻を責任編集された尾形先生の、この時の‘奇襲作戦’が実に見事だった。このことは、本学刊行の雑誌に一度書いた覚えがあるが、岡本先生を語るとき、再度触れないわけにはいかない。‘作戦’は、断わられても元々だから、岡本先生の自宅近くまで行って、そこから電話をかけ訪問したい旨を告げる。自宅近くまで来ていたら、人情として、まあ断わる人はあるまい。訪問にこぎつけたら、そこからは粘りあるのみというのだ。

訪問に至る経緯は省くが、玄関口で迎え入れてくれた岡本先生のなんともいえない柔和な笑顔が忘れられない。迷惑そうな表情で、言葉少なに追い返されても当然なので、私は内心ほっとすると同時に、これは‘うまくいく’の感触を得た。これが英語学研究一筋に歩んでこられた岡本先生の笑顔との出会いである。

就任していただいて数年後、先生に学科主任をお願いすることになった。主任は、なにかと会議が多く仕事が多岐にわたるので、私は出来る範囲内で時々お手伝いをした。その年度の秋、先生が胸いっぱい書類を抱え、私の研究室に飛びこんできた。「どうしよう、こんな」といって書類をひろげる先生の顔、それは本当に困り果てた童子の顔にどこか似ていた。ことわっておくが、先生をけなしているわけではさらさらない。心がまっすぐで、‘計算’を知らない先生の人柄が、要領と‘計算’と、時には二枚舌で物事を処理してきた私の心に実に新鮮に映ったことを言いたいだけである。先生は、書類の山を前にして、検討すべきさまざまな課題、また決定すべき事項の締め切りを正直にその通り受け取って悲鳴をあげられたのだ。こんな場合、会議の間、重要性においてかわりのない課題や事項にあえて優先順位をつけ、構成員への説明、議論の運び、必要に応じての説得工作などを頭の中でざっと描き、締め切りはあつてなきものと開き直るのが普通(?)だろう。このような‘計算’に無縁な先生の素顔に触れて、私は自分の打算的な現実主義の浅知恵を突かれた思いがした。書類を大雑把に分類し、決定事項の按配を説明すると、先生は初めてほっとされて笑った。その笑顔がまたいい。9年前、私を初めて迎え入れてくれた柔和な笑顔とはまた違う、まじりけのない微笑ましいばかりの笑顔であった。

先生は、昭和26年、ガリオア制度により1年間テキサス大学に留学され、昭和42年京都女子大学に就任されると、「変形文法」に関する論考をいち早く発表しておられる。門外漢の私が言っても貫禄がないが、先生は「変形文法」の紹介と研究における、わが国の先駆的な学者の一人であるのだ。このような先生の一面を思うとき、先生がふとみせるあれやこれやの笑顔が一層深く心にしみわたるのを覚える。